

【調査レポート】 広島地域の課題を文化と図書館から考える

山本功・佐藤瑛 (タメンタイ)

2026年3月30日

このレポートについて

本調査は、文化や芸術をめぐる政策立案の基盤となるデータを充実させることを目的とした独自調査です。タメンタイでは、アートマネジメント企画のかたわら、さまざまな調査分析や事業評価を受託してきました。しかしこれまでの調査案件のほとんどは首都圏など域外のクライアント向けであり、拠点とする広島地域に知見を還元できる機会はあまりもっていませんでした（これまでの関連実績はレポート末尾にまとめています）。調査実務の経験のなかで、広島では定量評価が難しい領域のデータが乏しいことに課題意識を覚えるようになりました。結果として、十分なデータに基づかない、あるいは偏った前提にもとづいた意思決定が散見されるのは歯がゆいところです。

そこでこのたび自主調査として調査を企画し、提言活動を始めることにしました。文化や芸術は「地方」と一括りにできるものでなければ、一部の特別な人や好事家の内輪の問題でもありません。その土地ごとに異なる特徴や課題について、地域の文化や芸術もまた密接に結びついているはずなのです。そんな認識のもと、企画機能ももつ民間の調査会社だからこそその視点とネットワークでもって現場の課題と既往のデータや新規の意識調査を紐づけ、さまざまな調査と分析を行っていきます。

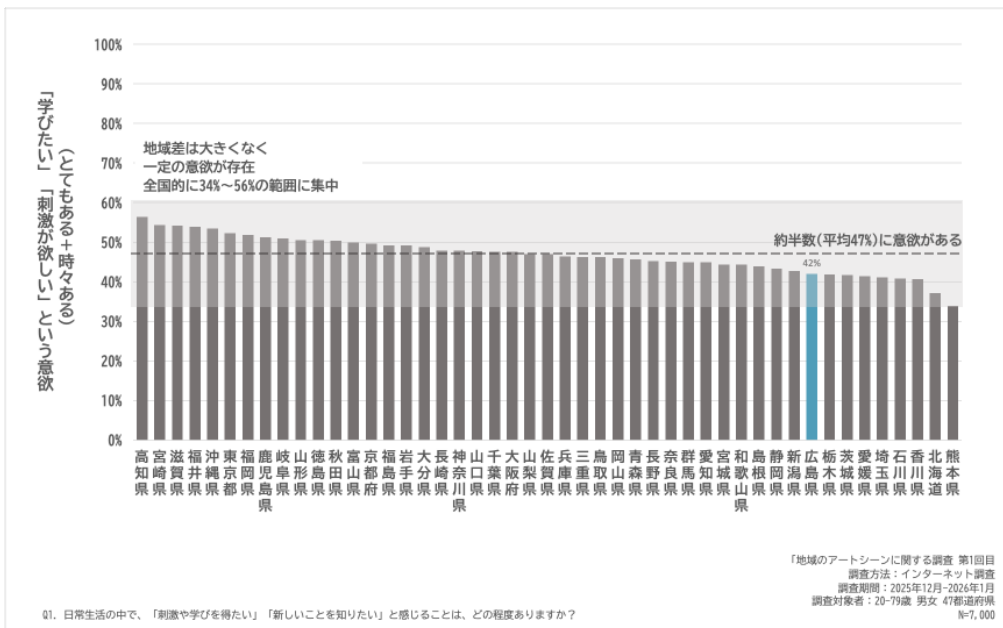
第一弾となる本レポートでは、地域の文化と図書館を主題とします。広島県では5年連続で人口の転出超過が全国ワーストとなるなど、人口流出が大きな課題となっています。その原因として、公演の「広島飛ばし」が取り沙汰されるなど文化面の課題も認識されていますが、問題を適切に把握するためにはより広範な視点から文化的な充足度を捉える必要があると考えます。

そこで、広島市立中央図書館の移転と再開館を控えたこのタイミングで、地域における知的・文化的刺激と図書館への意識をめぐる状況をインターネット調査により比較・分析しました。

知的文化的意欲から考える広島状況

まず、「学びたい」「刺激がほしい」という知的文化的な意欲は地域を問わず一定程度存在することを確認しましょう。地域によって多少の差はあれど、そうした意欲はなにも大都市に特権的なものではないことがわかります（図1）。広島県は全国平均こそ若干下回るものの、回答者の47%は一定の知的意欲を持つと回答しています。

図1 知的文化的意欲がある人の割合



しかしそうした意欲が居住環境のなかで十分に満たされるかといえば、それは地域によって異なります。図2に示すように東京都が1位となっているように、やはり都市部のほうが相対的に文化的環境の充足度は高い傾向にあります。

地方と都市部の知的文化的な環境格差の存在それ自体は否定しようもありません。かといって、地方部だからといって文化をあきらめるべきかといえば、それはまったくもって正しくなく、地方部といえど一様ではありません。

今回の調査では、こうした刺激や学びは居住継続の理由にはならないものの、出ていく理由としては顕著であることがわかりました。図3と図4が示す通り、たとえば広島県の場合、居住継続に積極的な理由として「自分の関心や価値観を満たす活動や刺激が得られている」を選んだのはわずか7%で全国43位の水準でした。一方、今後広島に居住を継続しないと回答した層では49%が「日常生活の中で刺激や学びを得られる機会が少ない」ことを離脱理由に挙げました。これは全国14番目に高い水準でした。

図2 知的文化的意欲を満たす場についての認識

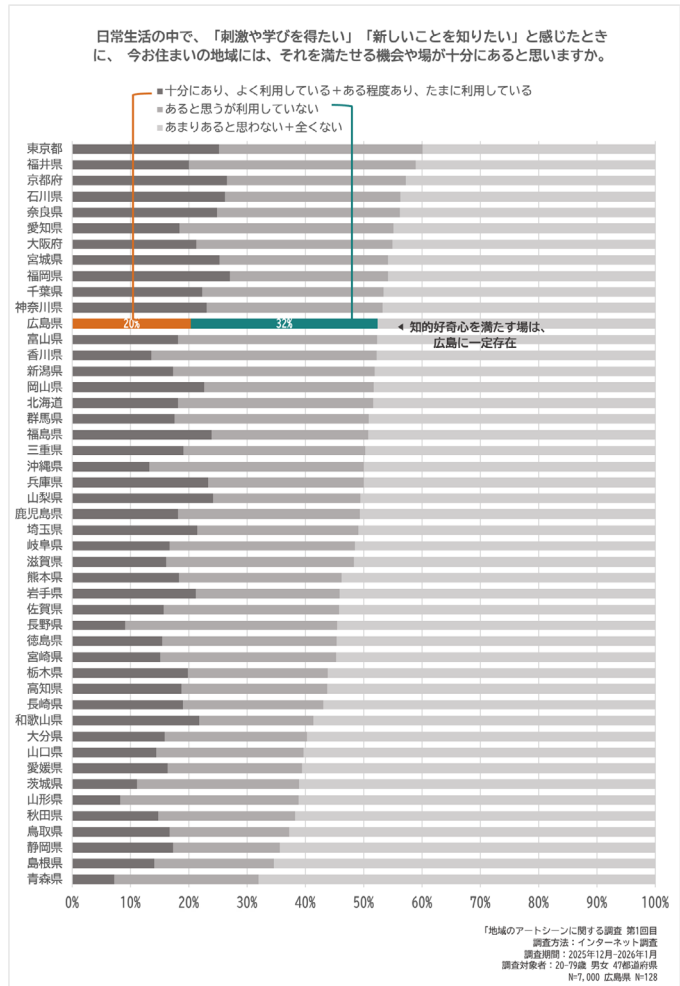
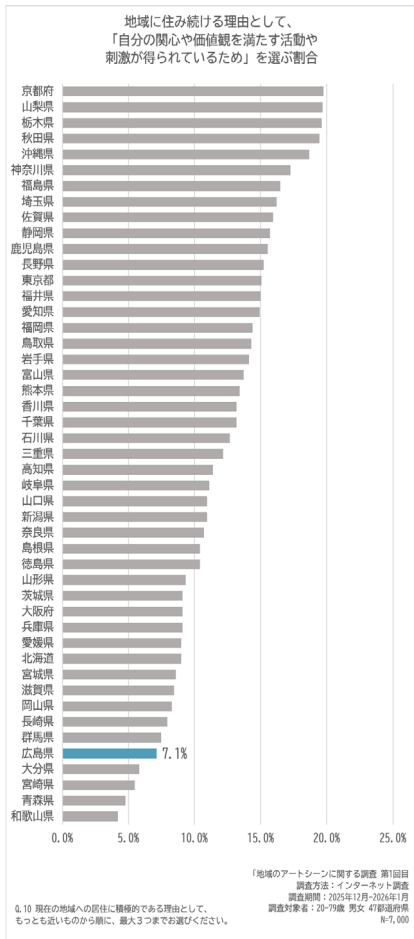
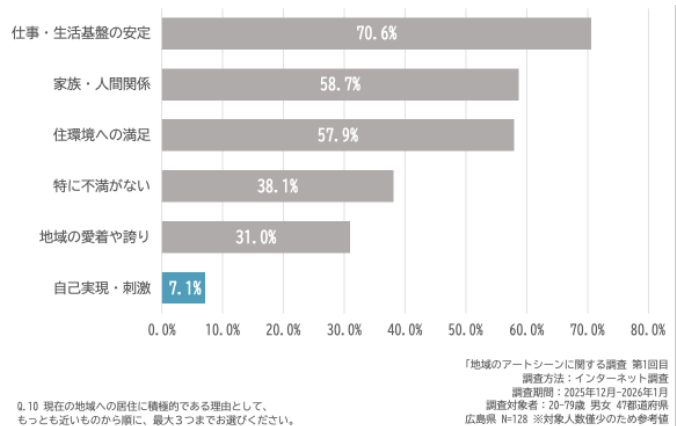


図3 文化的刺激と居住継続意欲の関係



広島県では知的文化的好奇心を満たすための場は一定程度存在しているとの認識にも関わらず、その不足が転出理由になっていることをどのように理解すればいいでしょうか。刺激や学びを得る場として具体的な類型を分析したところ、図5のように全国平均と大きな傾向は共通するものの、広島県では図書館や書店を選んだ割合が全国平均を下回っていることがわかります。図書館の利用頻度も全国平均を下回っています。一方、若年層の流出原因として大きく取り上げられている音楽ライブやコンサートの割合は全国平均並みでした。

図4 広島県への居住継続理由



広島における図書館の位置づけと住民意識

2026年4月1日に広島市立中央図書館が新たに移転再開館します。公共図書館には、本の貸し出し施設に留まらない役割が期待されるようになってきています。情報拠点としての充実はもちろんのこと、住民の居場所としてコミュニティの結節点としての機能を強化することも求められるようになってきています。

こうした潮流を受けて、地域住民が図書館に抱くイメージを尋ねたところ、その意識は「本資料」「静かさ」「学習」といった設備的・機能的側面に偏っており、「文化や歴史」「新しい発見」「人や活動のゆるやかなつながり」といった社会的・文化的ハブとしての役割認識は希薄であることがわかりました（図6）。図書館のオープン後、どのようにこの場が利用され、認識が変化していくのかには引き続き注目していきたいところです。

文化的充実感と将来期待の関係

文化は多面的なものです。音楽も美術も図書館も、それぞれ別個の問題として切り分けて考えるのではなく、接続した生態系として捉えていく必要があると考えています。

こうした認識のもと行った今回の調査では、それぞれの地域の文化への充実感は住民の「将来肯定感」を左右することがわかりました。図7にまとめたように、「行政が文化芸術を重視していると住民が感じられる」、「『この街はこういう文化の街だ』と住民自身が語れる」、「生活の中で文化芸術が身近に感じられる」という3要素の充実度が高い地域ほど「この街の将来にワクワクできる」という住民の将来肯定率が有意に高くなることが明らかになりました。

なにか単発の施策によって転出超過を食い止めることは困難です。しかし、明確なビジョンにもとづいて地域の文化を育むリーダーシップをとる存在があることが住民の意識に共有されている地域ではその将来に期待できる意識が高まるのです。

図5 知的好奇心を充足する場所の認識

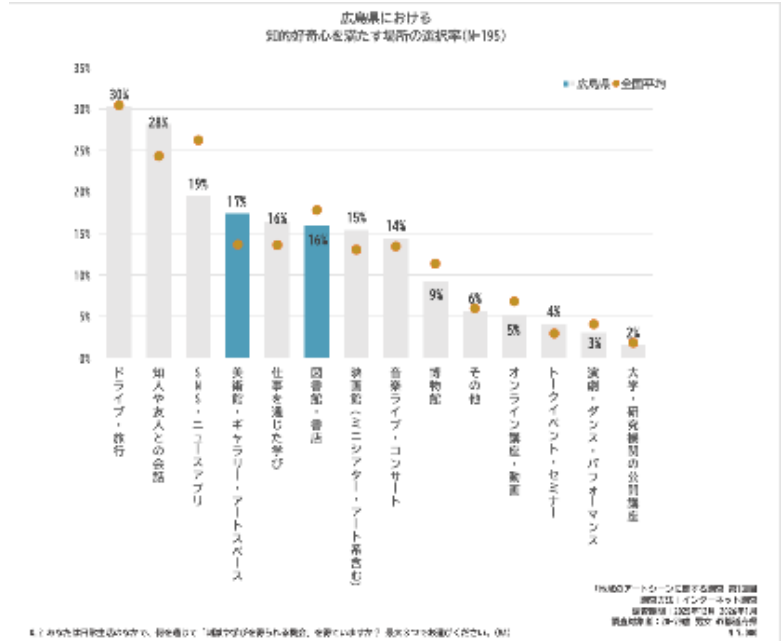


図6 広島における図書館のイメージ（複数選択）

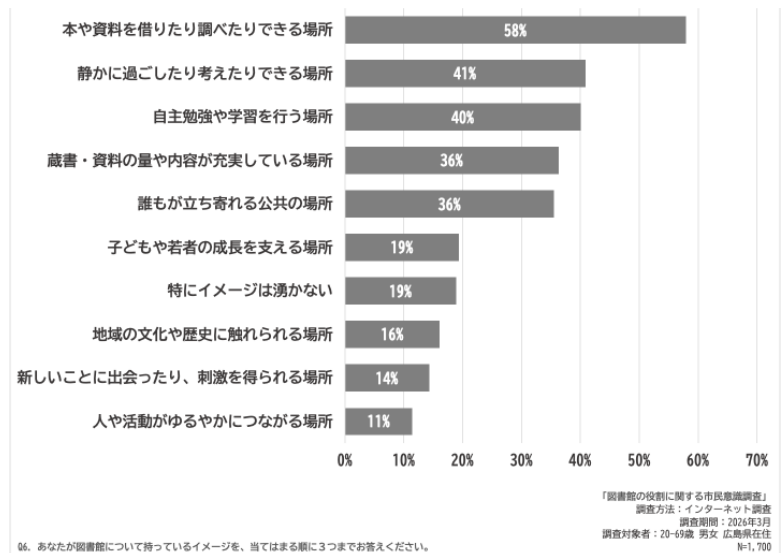
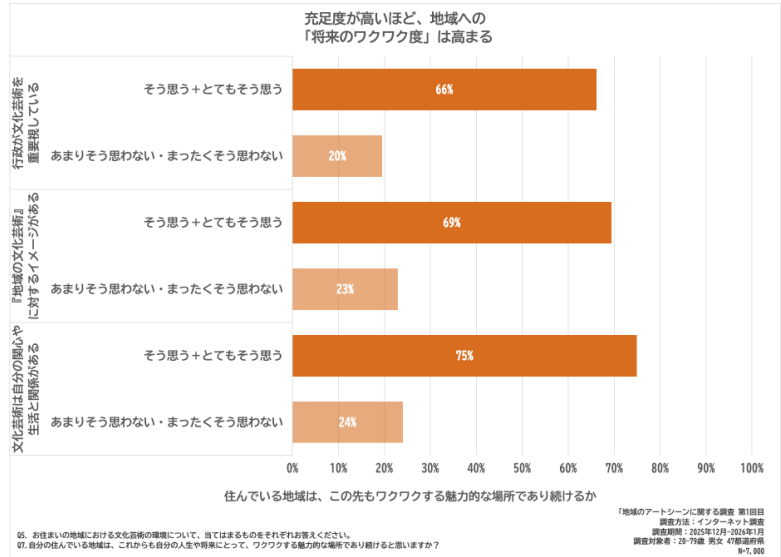


図7 文化的充実感と将来期待の関係

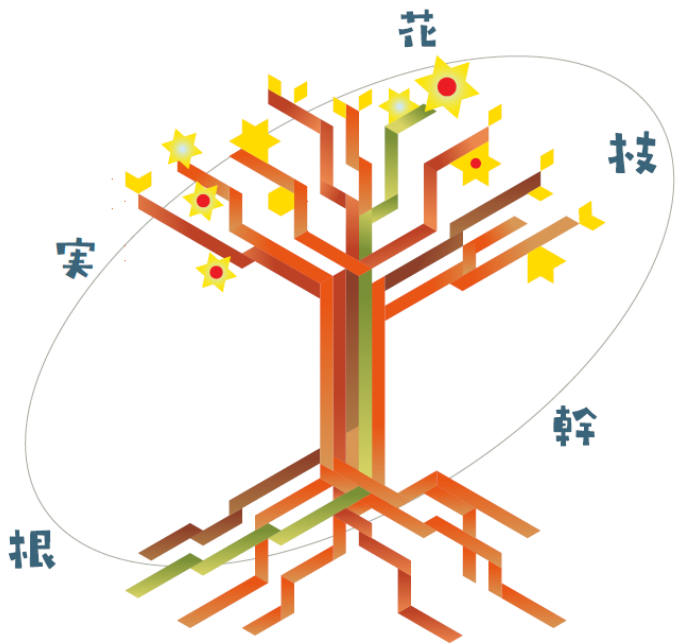


考察

地域の文化的な価値は、建築や公演といった目立つ部分だけでなく、花を支える根・幹・枝、すなわち日常的な文化環境、住民の関心と参加、行政のビジョンといった生態的なシステム全体によって生み出されるものです。外部からの「切り花」的な輸入だけでなく、そこで交流を醸成し、地元の土壌に還元されるまでの循環サイクルを機能させない限り、養分の流出超過は止まりません。

本調査の分析成果として、文化芸術が地域の中で意味を持つまでの構造を体系的に整理した「文化の木モデル」を提唱します。このモデルでは、文化芸術を単発の作品やイベントとしてではなく、地域の文脈に根ざした重層的な構造として捉えます。地域の歴史や記憶、知的土壌が「根」となり、制度や担い手による支えが「幹」を形成し、人々と文化芸術が出会う場や接点が「枝」として広がり、その地域ならではの表現が「花」として現れます。そしてこの花が住民の生活実感や地域への前向きさにつながることで、「実」として地域に還元され、循環していくのです。

図8「文化の木」モデル



広島にみる具体的な地域分析

たとえば広島県は、文化芸術の資源や活動が一定程度存在し、住民の接触機会も完全には欠けていないにもかかわらず、それらが地域の中でひとつの明確な像としてまとまりにくく、地域への前向きさや将来期待に接続しにくい状態にある地域として類型化されました。この背景として、過去志向が強いことや、文化芸術の担い手・役割分担が見えにくいことが挙げられます。また、広島市は政令指定都市 20 市の中で唯一、文化政策に関する独自計画を策定しておらず、広島県の計画も 2003 年の策定以降改訂されていないなど、制度面での課題とも符合する結果となりました。

広島市立中央図書館の移転再整備にあたって、その意思決定プロセスの不透明さへの批判があったほか、論点も中央公園かエールエールかという立地論が際立ち、新たな図書館によってどんな文化を育もうとしているのかという議論が霞んだ印象があります。

図8 広島型「文化の木」モデル



そのなかで、映像文化ライブラリーと子ども図書館が集約され、郷土資料館のサテライトも併設するなど、異なる領域の機能蓄積が一気に進むこととなりました。その是非はさておき、こうした施策によってどんな新たな変化を創出しようとしているのかという展望は必ずしもクリアではありません。「平和文化の情報拠点」という抽象的な理念がどのように新施設で具現化され、それをどんな観点から評価し改善していくのかも不明確なままです。昨今の建設費高騰もあって移転費用は 131 億円に膨らみましたが、図書館には費用便益分析が義務付けられていないこともあって、その効果検証のありかたは物差しの検討すら行われていません。

文化的な環境整備を地域の暮らしや文化システムの成熟に貢献させるためにはハード面の更新だけでは不十分で、住民の学ぶ意欲や文化的刺激に接続するためのソフト面の継続的な普及施策と一体での評価が欠かせません。その意味で、場当たりの対応を脱却した文化面の中長期的なビジョンの提示とその理解を広める努力が求められます。

今後の展開

引き続き、地域の文化的活力と資本効率について、調査成果をさらに深掘りし、後続レポートを刊行していきます。新図書館オープン後、住民意識や社会文化的なハブ機能の変化についてもあわせて継続観測していく予定です。自主調査ゆえのリソースの制約はありますが、課題意識を共有する関係各位とも積極的に連携を深めていくことで規模と精度を向上し、具体的なインパクトにつなげていければと考えています。興味を持ってくださった方はぜひお気軽にお問い合わせください。

調査について

本レポートは下記のインターネット調査の結果に基づいて分析を行いました

- ・ 地域のアートシーンについての調査 | 2025年12月～2026年1月 対象：全国 20-69歳男女 7000人
- ・ 図書館の役割に関する市民意識調査 | 2026年3月 対象：広島県在住 20-69歳男女 1700人

「文化の木」について

詳細は、先立って絵本としてまとめています。あわせてご参照ください。

『文化の木 地域の文化芸術の健やかな生育のために』

<https://store.tamentai.co.jp/products/the-tree-of-culture>

本件に関連する主な公開実績

山本功 (2026). 『文化の木 地域の文化芸術の健やかな生育のために』タメントアイ. ([link](#))

山本功 (2025). 「同時代の表現を支えるエコシステム」. 米家志乃布ほか (編著) 『アートの地理学：ビジュアル・アートとパブリック・アート』pp. 187-192, 古今書院.

タメントアイ (2024) 『日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 「True Colors Festival 事業」効果検証報告書』. ([link](#))

デロイトトーマツグループ (2024). 『Deloitte Art & Finance Report 特別編』. — 記録支援担当. ([link](#))

山本功 (2022). 「国際平和文化都市広島における新たなアニメーションのイベント『ひろしまアニメーション 2022』が残した足跡」ひろしまアートシーン. ([link](#))

山本功ほか (2022) 「文化と地域間の公平性」(グループミーティング：クリエイティブ・ウェルビーイングと文化権). だれもが文化でつながる国際会議, 東京都美術館, 2022年7月3日.

山本功 (2021). 「地理学からアートへ, アートから地理学へ」『京都大学地理学談話会会報』, vol.32, pp. 8-12.

調査・分析

山本功 (やまもと・いさお)

1992年広島県生まれ。京都大学文学部で人文地理学を専攻。卒業後、公益財団法人福武財団(香川県)を経て2018年より地元広島に拠点を移し、アートマネジメント事業や調査事業等を手掛ける。調査レポートや記録集の編集・執筆、展示企画のキュレーションを通じ、文化芸術を通じた地域資源の涵養や交流促進に取り組む。

佐藤瑛 (さとう・あきら)

1993年広島県生まれ。お茶の水女子大学理学部情報科学科卒業。都内の外資系コンサルティング会社、広告代理店を経て帰郷し、調査設計やデータ分析業務を手掛ける。数値の背景にある論理や社会構造と創造性の接続を実践している。

お問い合わせ先

メール yamamoto@tamentai.co.jp

電話 082-208-1537 (山本)